

一日(いちじつ)の長

文化祭の代替として作成したクラス旗が翻(ひるがえ)る中、クラス対抗の体育祭が催されました。



本校は一学年二クラス編成なので、学年枠を外しての対抗戦です。頑張れば一年生でも優勝のチャンスがあるんだと思いつながら、校庭に見学に出ました。

「一日の長」という言葉があります。「以吾一日長乎爾、無吾以也」(「われいちじつなんじよりちようずるをもつて、われをもつてすることなかれ」私が君たちより少し年上だからと言って、遠慮してはいけない)。原典では、自身を謙遜しつつ、弟子に「遠慮しないでね」と言う文脈で使われているんですが、校庭で行われた女子ドッジボールでは、下級生が遠慮なく挑んでも、三年



の知的なパス回しと、まもなく社会人という体躯からくり出すパワーボールの前に、下級生は一人また一人と外野へ送られていきます。(パワーボールを投げる瞬間の写真は、普段はおしとやかな乙女に免じて、

自主規制としておきます。)

それでも、男子サッカーでは、下級生が三年生を負かしたりして、各競技ともクラス優勝に向けて一致団結、応援にも熱が入ります。



最後はクラス対抗リレーです。これももう、太古の昔から体育祭の花形、定番中の定番ですね。スタートの混戦からの大歓声は、集団がばらけ前を睨んで

ひたすら追いかける一人への声援、そして何位であろうとクラスがゴールしたとき沸き上がる拍手に繋がって、一体感と熱気に包まれます。



文化祭や体育祭という行事の中で、協力したり、意見が対立したりして、友人の気づかなかった一面に触れることができたことでしょう。コロナ禍で工夫して運営した生徒会、実行委員会の皆さんにあらためて拍手を送ります。(閉会式ではそういう思いも込めて、全員で三七拍子で締めました。)

僕、妊娠しました

かなり、衝撃的でキャッチーな見出しとなりましたが、「妊娠したの?」と問われれば、「はい」としかお答えのしようがありません。



妊娠したんです、即席ですけれども。

この日の家庭科の授業は妊婦体験。写真のように男子生徒が妊娠状態を再現するおもしろの入ったベストを着せてもらって、即席妊婦（妊夫？）の誕生です。

「気をつけないと腰を痛めるからね」と先生から注意を受け、まずはベッドに寝ます。「うわ、起き上がれない」すぐさま夫役が手助け。即席夫婦愛です。



身ごもったのは、実は二人目。年子ですので、先に生まれた子をあやさなくてはいけません。「そのまま階段降りてみて」先生の指示が飛びます。乳飲み子を抱きながら、大きなお腹を抱えて階段に向かいました。「階段見えない。こわ〜」夫婦

愛その2発動！。乳飲み子を引き受け、妊婦（妊夫？）の手を引き階段を降りていく男子生徒の姿に、将来の優しい夫の姿を見ました。（私は、昔取った杵柄、おむつ替えを実演。手際の良さを褒められたのは言うまでもありません。）

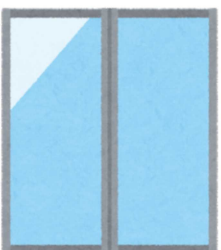
連載小説 自動ドア 最終回

仙田ノモ

もう何が何だかわからない。さすがにね、気味が悪いよ。もう、十時にも近くなったし、報告書は明日の朝にやることにして、帰る準備を始めた。

教頭はね、最後に校舎全部の戸締まりを確認しなきゃいけない。その日は、さすがに怖くてね、確認しないで帰ろうかと思っただぐらいだよ。でも、仕事だからやらなき

やいけない。もう、思いっくだけの明るい歌を口ずさみながら、校舎を見回ったんだ。何事も起こらずに、見回りを終えたときは正直ほっとしたよ。さっきのコーンっていう音も、何かの聞き間違いか、気のせいとか、空耳だって思うようにしようって思ったよ。最後に、荷物を持って、職員室を出た。



職員室の鍵を閉めて、事務室に向かったんだ。最後に事務室の鍵を閉めて、正面玄関から出ることにしよう。私は何を思ったと思う？

何も見なかった。正確に言うとな、何も見えなかったんだ。ただ、誰もいないがらんとした玄関の自動ドアが、すーっと開いて、そして、すーっと閉じるのが見えただんだ。

(完)

校長のつぶやき

半年お付き合いいただいた小説「自動ドア」は、今回で最終回を迎えました。

本作は、村上春樹「カンガルー日和（講談社文庫）」所収短編小説「鏡」を参考に作った習作です。「自動ドア」が単純な怪奇譚なのに比べ、「鏡」は登場人物の内面を描く複雑な構成になっています。読み比べると素人とプロの差が如実です（笑）。さて、私個人は、紙面の四分の一を埋めていた小説を失い、途方に暮れております。次号、どうしよう（困惑）。

（本紙中のイラストは「いらすこや」WEBよりお借りしています。）